

## 秋の教養講座 2016 開催

— 11/23 (祝) 放送大学奈良学習センターにて —

### 「ワイン」をテーマに、中浦理事&三野会長の「コンビ」による講演

奈良日仏協会「秋の教養講座」の講演会（演題は「ワインの奥深い魅力を探る」）が、去る11月23日（水・祝）放送大学奈良学習センターZ308室にて、放送大学奈良学習センターとの共催で行われました。講演会後は、会場を奈良市小西町の「ビストロ・プティ・パリ」に移して、懇親会が開催されました。

講演会では中浦東洋司理事が用意された原稿を、ところどころ三野会長に代読してもらいながら、ブドウの原産地と伝播経路、ワインの生産と消費、ワインの品質分類とラベルの読み方、フランスの主要ワイン（ボルドー、ブルゴーニュ、シャンパーニュ）、その他の



国のワイン事情、テイस्टィングの方法等について、プロジェクターの画像を混じえて、紹介されました。三野会長ご自身も中浦さんのお話の合い間に、ワインにまつわる挿話で

（例えば、渡辺淳一原作の映画『失樂園』では、心中する男女が最後に飲み交わしたのがボルドーの「シャトー・マルゴー」だったとか…）、会場をなごませてくれました。

盛りだくさんのお話のなかに、シャンパーニュをあける時、サーベルを用いてコルクごとボトルの口を切り落とす「サブラージュ」(sabrage) と呼ばれる方法についての紹介がありました。実際どのようにしてなされるのか、聴衆の興味を引きました。

ビストロ・プティ・パリでの懇親会では、山本シェフの本格的フランス料理を、美味しいワインとともに堪能しました。今年8月に奈良県の国際交流員に着任したばかりのジャンヌ・オストリーさんがゲスト参加され、晴れやかな雰囲気の中、参加者同士の会話に華が咲き、18人の参加者ひとりひとりが自己紹介をし、互いの懇親も深まりました。当日飛び入り参加された放送大学の受講生の方の口から、とつぜん次々とフランス語が繰り返された時には参加者のみなさんの微笑みを誘い、日仏協会ならではの楽しい懇親会となりました。（浅井直子）



## ワインは風土のびん詰め

中浦 東洋司

今年の講演テーマに「フランスの二大ワインとシャンパーニュ」を選びましたが、ワイン大国の中の筆頭ともいえるフランスのことを私の如き新米が、多くの諸先輩を前にして語るということで、大変恐縮しつつ本番に突入しました。しかも今回は健康上の理由で、三野会長に私の作成した講演内容を伝えていただくという変則事態になりました。ため、聴衆の皆様は戸惑われたことと拝察いたします。しかし、会長が培ってこられた的確な講演術のお蔭で、私の未熟な「語り」による講演より、はるかに中身の濃い二時間になったことと確信しております。改めて三野会長に敬意と感謝の意を表します。また、講演内容作成にあたって、当協会法人会員ビストロルノールの北田浩久さんご夫妻から貴重なご教示をいただいたことにも、感謝したいと思います。

フランスの主要ワインとその関連課題につきましては範囲が広汎過ぎたかもしれませんが、ボルドーとブルゴーニュ、シャンパーニュに関し必須の基本事項をご認識いただけた事と存じます。ワインは知識で飲むものではありませんが、酒店で膨大な数の銘柄を目にされたとき、今回の内容が皆様のワイン選びの「よすが」となりますれば幸いと存じます。

フランス文学の庭から <48>  
名句の花束

三野博司 (会長)

Carmen sera toujours libre. (1)  
カルメンはいつだって自由なのさ。  
(プロスペル・メリメ『カルメン』1845年)

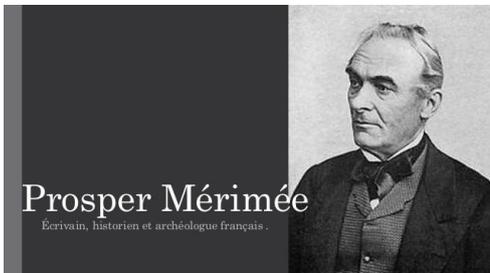


今回はボーマルシェを取り上げ、その二つの戯曲がオペラ化されて広く知られるようになったと述べました。同様の例として、すでに『名句の花束』第38・39回で、ベルギーの作家メーテルランクの『ペレアスとメリザンド』を紹介しています。これらのように、戯曲をオペラとして上演するにあたっては、翻案に際しての変更は比較的小規模なものにとどまります。他方で、小説のオペラ化となると、作品の構成、とりわけ語りの構造の大きな変更が必要になる場合が多いようです。

オペラ化されたフランスの小説で、一番にあげるべきはやはり『カルメン』でしょう。メリメの原作は1845年に発表されました。小説を書くと同時に考古学者・言語学者・史跡監督官でもあった彼の『カルメン』には、作者の体験が裏打ちされています。4つの章に分かれ、まず第1章では、作者の分身とおぼしきフランス人の考古学者が語り手として登場し、その旅物語が始まります。彼はスペインのアンダルシア地方で調査中、怪しげな男ドン・ホセに出会います。続く第2章で、語り手はボヘミアンの女カルメンと遭遇し、彼女に同行して入った部屋でドン・ホセに再会します。その後数か月が経過して、彼はまたもや、今度は囚人となったドン・ホセに面会するのですが、実はこの2度目と3度目の出会いのあいだに、ホセはカルメンを殺しているのです。ホセは自分の悲しい生涯を語りはじめます。続く第3章全体が、ホセが語る数奇な体験の詳細です。このあと、さらに第4章が付加され、語り手がジプシーに関して学者としての蘊蓄を披露します。

ビゼーのオペラは、第3章のホセの物語に基づいていますが、これは小説全体の5割ほどでしかありません。台本作者はオペラ化にあたって大きな伐採を行い、物語の核心部分だけを取り出して、奔放で淫蕩なジプシー女のドラマチックな物語に仕立てあげたのです。そうした要素はもちろん原作にも含まれていたわけですが、メリメの学究的な態度と、抑制された筆致によって、この作品はむしろ古典的ともいえる端正な姿を呈していました。オペラは、そのなかから、強烈な個性をもった不滅のヒロインを引き出したといえるでしょう。

この第3章では、ホセが語り手であり、すべてが彼の視点から語られます。彼は命令に従う兵士であり、カルメンを逮捕しなければなりません。彼はまた家族の秩序に従う息子であり、母や婚約者がいます。さらに彼は19世紀の社会において男性としてふるまうことを要求されます。しかし、カルメンによって魅惑され、その魔力にとらえられたホセは、こうした社会的秩序から転落していくのです。カルメンは、彼の男性としての優越性を奪い、力関係を転覆させ、相手を懇願する存在へと至らしめます。ホセは、密輸の仕事仲間に加わり、人殺しに手を汚し、ついには嫉妬の果てに山中でカルメンを殺害するに及ぶのです。



ドラマの観点から統一性を与えているのは円環構造です。投げる行為で始まり、同じ動作で終わります。カルメンがアカシアの花を投げてホセを誘惑し、これが彼の転落の始まりとなります。そして、最後はカルメンが、むかしホセからもらった指輪を投げ捨て、相手の怒りを誘います。彼女は、相手を挑発して、自分を殺すようにと導くのです。この二つの場面はメリメの原作にもあるのですが、オペラではとりわけこの投げる動作が強調されて効果をあげています。ここでは、カルメンが初めから終わりまで指導権をもち、ホセを挑発し続けます。しかし、そのカルメンにも自由な選択が許されているわけではありません。死の宿命が彼女を支配しているのです。彼女は何度かカルタ占いを行って、こう言います。「あんたがいつかあたしを殺すことはわかっている。死が待っていることは知っているよ」。こうして、逃れられない悲劇へと向かって二人は突き進んでいきます。

フランス語講座「学び直しのフランス語」開講のお知らせ

- ◇日時：2017年1月16日から毎週月曜 15:00~17:00
- ◇講師：三野博司先生 (放送大学奈良学習センター所長)
- ◇会場：生駒市コミュニティセンター2階会議室
- ◇申込&問い合わせ：mino.hiroshi@gmail.com (三野)
- ◇内容：もう一度しっかり学びたい人向けです。ことばの仕組みや表現を学び、フランス文化の奥深い魅力を探ります。

## ヴェルサイユ市からの賓客、奈良へ

濱 恵介

10月14日から3日間、姉妹都市提携30周年を記念し、奈良市から招待されたヴェルサイユ市長以下4名の代表団が奈良市を公式訪問しました。フランス語通訳の依頼を受けた奈良日仏協会からは、会員の濱恵介と仲井秀昭の二人が分担し諸行事に同行しました。来訪者は、市長 François de Mazières、同夫人 Christine de Mazières、および市長補佐の Florence Mellor と Marie Boëlle で、全員が初めての日本訪問でした。なお、奈良市の担当部署は、観光経済部観光戦略課です。

**1日目(濱・仲井担当)** 市のマイクロバスで関西空港へご一行を出迎え奈良の宿泊先にお連れし、午後は猿沢池、興福寺あたりを散策した後、市長表敬訪問に臨みました。市庁舎の前にはフランス国旗が掲げられ、多数の市役所職員と共に仲川市長みずから玄関に出迎えるなど、歓迎ぶりが印象的でした。ヴェルサイユの間と呼ばれる応接室で、相互のご挨拶と贈り物交換、歓談などが行われました。夜は奈良市長、副市長ら市の幹部との歓迎夕食会が催され、在京都フランス総領事も同席しました。

**2日目(濱担当)** ここからは奈良の名所観光や異文化体験のプログラムです。まず飛火野で「鹿寄せ」を見物【右写真】。ホルンを吹くと撒き餌や鹿センバイを目当てに鹿たちが沢山集まり壮観です。そのあと若草山の中腹まで登り、奈良市・奈良盆地を一望しました。昼食は奈良市指定文化財の古民家を改装したレストランにて。午後は田原地区にある竹西農園で茶摘みと茶モミの体験してもらい、自ら摘んだ茶葉で淹れたお茶を賞味。快晴の天気恵まれ素晴らしい一日でした。



**3日目(仲井担当)** この日の同行は夕方から、平城宮跡の野外ステージで催された「維新派」による最後の公演「アマハラ」を鑑賞しました。その晩は奈良市国際交流協会主催のお別れ夕食会。奈良市と交流協会以外の参加団体は、奈良日仏協会、国際ソロプチミスト奈良、奈良市観光協会、三野会長のご挨拶は当会の紹介や交流への期待について両国語でなされました。

振り返れば、奈良市側の周到な準備と懇切丁寧なお世話、奈良が持つ豊かな文化資産と自然環境のお陰で、ヴェルサイユ市の方々は奈良と日本の非常に良い印象を受け、大いに満足された様子でした。また、姉妹都市の意義は両市のトップが会見するだけでなく、市民や団体が交流を深めることにあり、両市間の活発な文化交流・経済活動を期待する発言がスピーチと会話の端々に聞かれました。奈良日仏協会としても奈良市との協力などを通じた国際交流の活発化が期待されます。今回は仲井さんの通訳力のお陰で役目を果たせました。私にとっては楽しく知的刺激の多い3日間でした。

最後に、上の写真をお送りした返礼にメロールさんから頂いたEメール(抄訳編集担当)を紹介します。

**Cher Monsieur,**

Encore merci pour votre mail et surtout votre présence et votre aide à Nara. Comme François de MAZIERES l'a écrit au Maire de Nara dès notre retour, nous avons particulièrement apprécié notre séjour, riche et complet et nous avons été très touché par toutes vos attentions, votre gentillesse et votre sens de l'hospitalité, toujours avec élégance. Ce fut un moment unique plein d'émotion et vous avez raison de mentionner qu'il était largement temps de découvrir le Japon et Nara en particulier. Merci pour cette belle photo qui illustre bien notre voyage dans votre si beau pays. Nous garderons un souvenir très ému de toutes nos rencontres et nous serons heureux nous aussi de vous retrouver à Versailles, cette fois.

Belle soirée

Florence Mellor

メールそして奈良ではお世話になり、ありがとうございました。私たちの滞在が多彩で申し分のないものとなり、感謝申し上げます。気の利いたご配慮、ご親切、おもてなしには、感じ入るばかりです。感激に満ちた貴重な時間を過ごすことができました。仰るとおり、日本とくに奈良を知るのに良い時期でした。お写真ありがとうございました。とても美しい国に旅したことがよくわかります。私たちの出会いによる感動に満ちた思い出を大切に、こんどはヴェルサイユで再会できれば嬉しく存じます。

## 「三木康子ピアノリサイタル」を聴いて

三野 博司

ベートーヴェンのピアノ・ソナタ第29番、その第3楽章が聴きたくて、会員の三木康子さんのピアノリサイタルに出かけました。11月1日、少し寒くなり始めた日でした。「時空を超え未来へ響く音を求めて」のシリーズ第5回。前回は3年前、秋篠音楽堂でした。今回はいずみホールに会場を移して、変わらぬ意欲的なプログラムです。まずショパンの「幻想ポロネーズ」のあと、20世紀へ飛んで、三木さん得意のラベル「高雅で感傷的なワルツ」、さらには西村朗の現代曲「オパール色のソナタ」が続きます。こうして、耳がロマン派から20世紀末の音楽へとなじんだあと、休憩後、一転してベートーヴェンの大曲「ハンマークラヴィーア」。たたきつけるように雄大に始まる第1楽章、第2楽章に置かれたスケルツォのあと、いよいよ深く瞑想的な第3楽章が始まります。いつくしむような指の動きから透明感をたたえた音たちが生まれ、単純でありながらどこまでも深く精妙であり、会場全体がそれこそ時空を超えて、異次元へ運ばれたかのようです。続く第4楽章のフーガも、いま浸っていた深い瞑想の余韻を確認するかのよう響きます。前半の入念に選曲された3曲も、ベートーヴェンのソナタの他の3つの楽章も、すべてが第3楽章アダージョ・ソステヌートのほとんど天上的な調べに奉仕しているかのようでした。

## 2016 年度ガイドクラブ「當麻寺散策」(10/15) 報告

當麻寺駅に集合し、私達 8 名が寺までの道を歩いていると、ちょうど地元の秋祭りの神輿に出くわしました。賑やかな雰囲気にもまれ、秋晴れの中をゆっくり進みました。途中、相撲館「けはや座」で休憩。レニエ先生の息子さんが、私と同じく相撲好きというので誰のファンかきいてみましたが、先生は息子さんほどは力士の名前を知らないそうです。

當麻寺の門を入ると二上山が背景に見え、奈良特有のゆったりした、なつかしい風景です。當麻曼荼羅、中将姫像を見ることができました。また、あの陀羅尼助が作られていた頃使われた井戸や大釜もありました。釈超空、芭蕉の句碑の説明をフランス語、日本語を織り交ぜながら聴き、思いを馳せませす。帰り道では、金子みすゞさんの詩集が置かれている土産物店で一服し、「奈良みすゞの和」の代表をされている店主のお話を伺いました。

「お魚」という詩を読んで、この純粋な言葉をもったみすゞさんと、いま見てきたばかりの中将姫が重なるように感じました。日暮れには駅まで戻り、入院中の父へのお土産に中将餅を買い、そして皆で食事し歓談しました。

三重県からはるばる来られた方、ノストラダムスへの関心のためにフランス移住予定の方のお話などなど…、思い出に残る一日となりました。  
(西久保美芳)



爽やかな秋晴れの日、仏教を研究しておられるレニエ先生を囲んで當麻寺の広い境内を見学しました。参加者には初対面の方もおられましたが、そこはフランス語仲間ということで通じ合うものがあり、散策後のレストランでの食事会と、夜がふけるまで楽しい時間を共有することができました。都会にあるお寺と違って、日曜日にもかかわらず訪れる人も少なく、ゆったりとした時間が流れています。お寺で働いている人々や、参道の土産物屋のご夫婦とお話することもでき、旅行気分を味わうことができました。

ここは中将姫伝説で有名なお寺です。姫が蓮の茎を集め、井戸で清めたところ五色の糸となり、一晩で織り上げたと伝えられているのが、巨大な国宝綴織當麻曼荼羅です。室町時代文亀年間に転写された「文亀曼荼羅」を観ることができたのですが、残念なことに黒く変色していて、元の極楽浄土の図柄は判別できませんでした。一説によると、中将姫から百年近く遡った頃、河内（大阪府太子町）から役行者の私領であった當麻に移されたとのこと。この日はちょうどお祭りで、だんじりの行列を見られたのですが、前日、山ひとつ超えた古市古墳群の近くで見ただんじりと似ていると感じました。(森裕子)

近鉄電車が長谷寺の駅を通過し、奈良盆地に向けて高度をどんどん下げ、三輪山が右前方に近づき、ちょうど大和朝倉駅を通過する頃、はるか彼方に二つの頂のある山が見えてくる。懐かしい二上山だ。懐かしいと書いたのは、かつて大阪市内で単身赴任をしていた頃、故郷の三重県のある方向に見えるこの山を時折眺めていたからか、それとも、学生時代に読み耽っていた万葉集のこの山にまつわる歌がそうさせるのか。今回、二上山の麓を目指すことになったのは、必然だったのかもしれない。

近鉄當麻寺駅で参加者のみなさんと集合し、ピエール・レニエさんを先生に参道を進む。仏語と仏教の一石二鳥のイベントなのに、フランス語はさっぱり出てこない！ ちょうど地元の神社の祭礼なのか賑やかな山車が狭い参道を移動していた。當麻寺の境内は自由に入出入りすることができ、開放感に溢れていた。南側の山裾には東西の塔が静かに空を目指し、西には二上山が我々を見下ろすように黙って聳えていた。當麻曼荼羅とは長い時を越えて対面する。古来、人は二上山に沈む太陽に極楽浄土を感じたという。駅への帰り道、余りにも大きなお月さまが東の空に上がってきたが、それに阿弥陀如来のお顔が重なったのは、當麻寺参拝のご利益なのだろうか。

翌朝、ひとり二上山駅に降り立ち、頂を目指す。展望所から大阪平野と奈良盆地を代わる代わる眺めていると、この世界そのままが、曼荼羅であるという感覚が生まれてきた。昨日と同じ祭り囃子が聞こえてくる當麻の里へ下りると、西には、大津皇子が、中将姫が、折口信夫が、そして多くの日本人が見たであろう二上山が相変わらず静かに座していた。この感覚をどのようなフランス語で表現すればよいのだろうか？  
(三重日仏協会 田中豊士)

折口信夫は 18,9 歳の多感な青年期當麻寺中之坊に滞在し、20 年後の 5 月、中将姫の現身往生を再現する寺の大祭「練供養」を見物したようです。庭園内にある歌碑の短歌を仏語訳とともに以下に紹介します。(浅井直子)

《練供養 過ぎて静まる 寺の庭 二十年前を 隠しつつ居し》

La fête de Nériryô / se termine, et se calme / le jardin du temple / où je suis en cachant / ce moi d'il y a vingt ans



第42回シネクラブ例会(10/23) 報告

『六つの心』(Cœurs, 2006)『愛して飲んで歌って』(Aimer, boire et chanter, 2014) 『24時間の情事』(Mon amour Hiroshima, 1959) に続いて、アラン・レネ特集第4回目(最終回)は、『風にそよぐ草』(Les Herbes folles, 2009) をとりあげました。映画の魔術を駆使して、たえず観客を刺激し楽しませながら、独特の目配せや問いかけで、観客とコミュニケーションしようとするレネの「開かれた精神」(esprit ouvert) に、あらためて敬服の念を深くしました。(浅井直子)



◆「映画は二度終わる」(fin が画面に二回現れる)。男と女が抱き合っ、昔のハリウッド映画ならここで音楽とともにエンドマークが出るころだが、「私の映画は勿論違いますよ」と、用意されたアラン・レネ監督の fin は、衝撃的といえる。だが人生とはこんなものと、ごく自然に受け止めることも出来る。財布を拾ったことを持ち主の女性(サビーヌ・アゼマ)に電話で知らせようとする男性(アンドレ・デュソリエ)は、下心があるので言葉選びに疲れきってしまう。妄想を伴う自問自答が滑稽だ。ついに警察に届けに行くが、このときのお巡りさん(マチュー・アマルリック)とのやりとりも可笑しくて、思わず吹き出しそうになる。前半はユーモラスで後半は少しシュールな展開、鮮やかな色彩も目に残る。名監督の作品はさすが印象深いものだった。(長谷川明子)

◆学生時代に見た同監督の『去年マリエンバートで』よりはまだストーリーらしきものがありましたが、皆さん口を揃えて言ったように不可解な場面の多い作品。ストーリーは、年老いて苛立ちが狂気にまで高じたような男と、飛行操縦が趣味の女性歯科医とのふとした出会いから始まる関係を描いたもので、前半は男が女を追い、後半は狂気が伝染したかのように女性が男を追うというすれ違いが妙味です。心理劇と評する方もいました。私は映画が久しぶりだったので、背景のフランスの街並みや建物、家具調度、車や飛行機に見惚れてしまいました。



色の美しさや会話の楽しさを指摘した方もいました。普段使わないような台詞の掛け合いにナレーションがかぶさって詩的な雰囲気や醸し出したり、非日常的な角度から撮影するなど映画らしい作りが至る所にありました。敷石の隙間から生え出る雑草の映像が反復されたり、「猫の餌を食べるには猫にならないとだめなの?」という最後のセリフなど、謎が謎のまま残されませんが、不可解なりに魅力のある作品だと思います。(杉谷健治)

第43回 奈良日仏協会シネクラブ例会(2/26) 案内 ★2月26日(日)

13:30~17:00 ★奈良市西部公民館5階第4講座室(予定) ★プログラム: サッシャ・ギトリ監督

『とらんぶ譚』(Le Roman d'un Tricheur, 1936年, 78分) ★参加費: 会員無料、一般300円

★飲み会: 例会終了後「味楽座」にて ★問い合わせ: Nasai206@gmail.com (予約不要)

★『とらんぶ譚(あるペテン師の物語)』は始まるとすぐ制作当時には考えられないような斬新さで、カメラの前に映画技師やスタッフたち全員を紹介するという型破りなことをし、映画のフィクション性を自ら明らかにする。続いて作家は全知の語り者のナレーションを用いて、1934年に刊行された自分の唯一の小説から引きだした華麗なる台詞を、無声の映像に独白する形で朗読する。会話部分のほとんどすべては俳優たちではなく、サッシャ・ギトリなる人物の流れるがごとき弁舌で朗読される。美学上の約束事からは外れるかもしれないが完全に革新的である。だからと言って観客は少しも退屈することはない。すばらしい台詞と辛辣な皮肉を聞くからだ。ブルジョワ的モラルを手玉にとりながら、作家は巧妙なやり方で善悪の境界をあいまいにすることを楽しんでいる。賭博や金儲けへの情熱、結婚外の多様な男女関係—結婚はただ実利的なものと考えられている—、さらには同性愛(目立たないようにではあるが)といった、当時のデリケートなテーマに取り組んでいる。ギトリは、言葉を武器として喜劇力を存分に発揮し、当意即妙に道徳を踏みこむ口調で、観客を何度も噴き出させる。(ピエール・シルヴェストリ)



D'une incroyable modernité pour l'époque, Le Roman d'un tricheur affiche dès le départ sa singularité en présentant devant la caméra tous les techniciens et collaborateurs du film, affirmant ainsi le caractère volontairement fictionnel du métrage. Ensuite, l'auteur se sert d'une voix off omniprésente pour déclamer un texte brillant issu de son unique roman paru en 1934. Ainsi, la quasi-totalité des dialogues n'est pas déclamée par les acteurs eux-mêmes mais par un Sacha Guitry très en verve, soliloquant sur des images muettes. Le postulat esthétique est pour le moins déstabilisant et totalement novateur. Pour autant, le spectateur ne s'ennuie pas une seule seconde à l'écoute d'un texte magnifique et d'une ironie cinglante. Se jouant de la morale bourgeoise, l'auteur se plaît à brouiller les pistes et à rendre floues les frontières entre le bien et le mal. Tout en douceur, il aborde des thèmes délicats pour l'époque comme celui de la fièvre du jeu et de l'argent, des liaisons multiples hors du mariage - ce dernier étant conçu comme seulement utilitaire - et même de l'homosexualité (discrètement sous-entendue). Se servant des mots comme d'une arme, Guitry déploie toute sa force comique et nous fait rire aux éclats de nombreuses fois grâce à un ton cynique bienvenu. (Pierre Silvestri)

## フランス・ワインの紹介 (5)「ラングロワシャトー クレマン・ド・ロワール NV」

夏にシャンパーニュの話を書かせて頂きましたが、今回はフランスのシャンパーニュ以外のスパークリングワインを紹介させて頂きます。スパークリングワインの中でも、シャンパーニュ方式と呼ばれる瓶内二次発酵で、シャンパーニュ以外の地域で造りだされるスパークリングワインのことを「クレマン」といい、造られる地域の名前を後ろにつけて、「クレマン・ド・ブルゴーニュ」ですとか、「クレマン・ダルザス (アルザス)」という風と呼ばれています。クレマンはそれぞれの地域で栽培されているブドウ品種を使用して造られますのでシャンパンとは微妙に味は異なりますが、シャンパン同様瓶内二次発酵で造り出されるので、キメの細かい泡立ちを持ち、何よりも価格がシャンパンの半分程というお値打ちさで、フランスでも日常的にはこのクレマンがよく飲まれています。今回ご紹介するのは、有名なシャンパン・ハウスのボランジェ・グループのラングロワ・シャトーという生産者による「クレマン・ド・ロワール」。ロワール地方を代表するブドウ品種のシュナン・ブランを主体としてシャルドネとカベルネ・フランをブレンドしてとても高品質なクレマンを造りだしています。瓶内熟成期間も 24 ヶ月以上とシャンパンの最低瓶内熟成期間よりも長く、リーズナブルなお値段でシャンパンに近い味わいを楽しめるとてもコスト・パフォーマンスに優れたスパークリングです。(法人会員 サン・ヴァンサン 竹中宜人)



Crémant de Loire Brut  
"Langlois Chateau"

### Recette de « Filet de canard cuit à la vapeur au sel » 「鴨の塩蒸し」

今回は、会員の青山登美子さんに「鴨の塩蒸し」を紹介していただきました。お家では毎年お正月には欠かせないお料理とのこと。シンプルだけど美味しそう。こんどのお正月さっそく試してみたくなりました。(編集部)

【材料】(4 人分) かもむね肉 1 枚 (約 250g)、粗塩適量

【Ingrédients】(Pour 4 personnes) un filet de canard (environ 250g), gros sel

1) 鴨肉は両面を金串で細かく突き刺し、粗塩小さじ 1 を皮側を多めにすりこむ。

Avec une brochette, piquer beaucoup la viande de chaque côté, frotter avec une cuillère à café de gros sel en utilisant plus de sel pour le côté peau.

2) フライパンに油をいれずに熱し、鴨肉の皮側を下にして入れる。すぐに脂がでてくるので中火にし、皮にこんがりときれいな色がつくまで焼く。たまった脂をスプーンですくって身のほうにかけ、表面が白くなったら取り出して脂をふく。

Faire chauffer la poêle à sec, y déposer la viande côté peau en dessous. La graisse du canard fond rapidement, cuire à feu moyen jusqu'à ce que la peau soit bien grillée. Ensuite, verser sur la viande de la graisse fondue avec une cuillère. Lorsque la surface a blanchi, retirer la viande et essuyer la graisse.

3) 鴨肉を小さなバットに皮を下にして入れ、よく蒸気の上上がった蒸し器にバットごと入れ、弱火で 15 分蒸す。

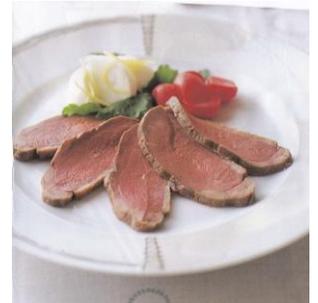
Mettre la viande côté peau en dessous dans une petite plaque à débarrasser. Mettre la plaque dans une marmite à vapeur bien chaude, faire cuire à la vapeur 15 minutes à feu doux.

4) 鴨肉を取り出して紙タオルで包んで乾燥しないようにして冷ます。肉汁はボウルにあけて冷まし、固まった脂は取り除く。

Retirer la viande, la laisser refroidir en l'ayant enveloppée dans du papier essuie-tout, pour qu'elle ne sèche pas. Mettre le jus de la viande dans un bol, le laisser refroidir et enlever la graisse durcie.

5) 鴨肉を薄切りにし、肉汁を薄くぬって器に盛り、野菜を添える。

Trancher la viande finement, l'enduire légèrement du jus de viande, la servir dans un plat accompagnée de légumes.



## フランス産チーズの紹介 (3)「トレフル」(Trèfle)



四つ葉のクローバーの葉にはそれぞれ「勇気」「愛情」「信頼」「希望」という意味があり、全部そろって幸せになれるといわれています。その昔、ナポレオンも戦場で馬に乗っていた所、偶然四つ葉のクローバーを見つけ、体を伏せた瞬間に銃弾がすれ違い、命を救われたというエピソードがあります。また、四つ葉は十字架の形に似ていることもあって幸運のシンボルとされています。

今回ご紹介する「トレフル」は、四つ葉のクローバーの形をしたシェーブル(ヤギ乳)チーズです。ロワール河一帯がシェーブルチーズの銘醸地ですが、トレフルはノルマンディー地方でつくられています。2005 年に誕生したばかりの比較的新しいチーズで、ヤギのミルク独特のクセや匂いはほとんど感じられず、シェーブルタイプ初心者の方でも美味しく召し上がっていただけます。

このチーズは熟成が進むとカチカチになる「セック」(sec)のものではなく、湿度の高い熟成庫で熟成し、柔らかな状態になる「アフィネ」(affiné)タイプのチーズです。トロリと中身がとろけてくる頃が、ちょうどよい食べごろ。なめらかな舌触りに程よい酸味が、爽やかな白ワインにぴったり！この時期、出番の多くなるスパークリングワインやシャンパンなど泡ものとも相性がいいです。シェーブルチーズは特にそのユニークな形が特徴的なものが多く、つい「ジャケット買い」したくなるものがたくさんあります。食べるラッキーアイテムなんて、いかがでしょうか？テーブルに華を添えてくれること間違いナシですよ。(法人会員 ビストロ ルノール 北田由佳)

## 会員紹介

### 「風」を感じながら

河野 美紀子 (こうのみきこ)

今年の初めに奈良日仏協会に入会させていただきました。そのあとすぐに、3月のフランス・アラカルトでのよし笛演奏の依頼があり、快諾したまでは良かったのですが、当日はコチコチになっていました。その演奏も含めて、今年はさまざまな場で演奏することができ、おかげさまで次第に慣れることができました。

おもえば東日本大震災以降、多くの人がそうであるように、私も自問自答してきました。「自分という人間は一体何者で、この自分に何ができるのか？」と。いろんな方のお力を借りて、「音楽」というひとつの答えを自分なりに見出したのですが、これがなかなか難問でした。なにしろ本来なら音楽は、うんと若い時に修行するものですが、私の場合はずいぶんと年を重ねてからのスタートです。それと、いまひとつ自分のスタンス（立ち位置）が定まらなかったのです。が、最近になって糸賀一雄さんという「障害児教育」の草分け的存在の方の「何をするかではなく、何処に立つかなんだよ。誰かの風になれたらいいんだ」という貴重な言葉を知りました。私にとって、これほど自分の気持ちにピッタリな言葉に出会ったことはありませんでした。「自分の位置を知る」—これもある方の言葉ですが、大切なことだと思います。

7月のフランス・アラカルトで、「ケルト民族」のお話が聴けたのは、大変よかったです。よし笛で、アイルランドやスコットランドの曲を演奏することも多いのですが、ケルトの流転の歴史に思いを馳せながら演奏すると、なおいっそう心に迫ってくるものがあります。フランス語やシャンソンを聴く機会も増えて、嬉しく思います。フランス語は、時として音楽のようにも聞こえます。日本語訳による『失われた時を求めて』の読書会にも参加し、若い頃に触れたフランス文学の香りを夢見ています。



9月のウクレレとよし笛の発表会にて

## 紅葉を愛でる

井田 眞弓 (いだ まゆみ)

ジャメ先生の火曜のクラスのメンバー3人で、講座終了後に奈良市東南郊外の山間にある正暦寺へ、紅葉狩りに行きました。途中の道路は混んでいましたが、3時過ぎ、早いうちに駐車が出来ました。着くと、山一面が赤や黄色に染まり、三三五五、人々が行き来していました。ゆったりとした中、四方を眺めながら、おしゃべりしながら、銀杏の樹の下の黄色のじゅうたんの上に足を止めると、連れのお二人はここぞとばかり携帯を取り出して、写真撮影されていました。3000本ものモミジがあるそうです。

本殿に上がり、拜んで席を立とうとしたところ、お隣で拜んでおられる紳士淑女がおられました。なんと、奈良日仏協会の野島副会長ご夫妻でした。お二人の仲良き姿に、「素敵！」と思った次第です。続いて、お庭を拝見しました。垣根が低くなっていて、手前とその背景の奥行きが広くみえ、ゆったり感を与えてくれます。立ち去りがたい思いでした。私はおみやげに草餅、清流庵の「柿えくぼ」を持ち帰りました。

一方、我が庭のモミジもなかなかのもの。11月10日ごろから、下葉が緑で、黄色そして赤のグラデーション。今年は夏が長くて、いつまでも暑い日々が続き、ヤキモキしていましたが、秋にはこの14年間で一番美しい姿を見せてくれました。



南側にモミジ、その北にピラカンサスの赤い実がなり、ヒヨドリ、小鳥たちがその実を啄ばみにやってきます。うちのデイケアセンターのみなさんで、「あ！来た来た」とささやきながら、ガラス扉から見るのが日課です。紅葉を愛でる、それは四季があって、その自然の中に何かを感じることを「サムシンググレート」（仏語なら *quelque chose de merveilleux* でしょうか？）と称える方がおられますが、自然の偉大な力にわたしも同じ思いです。今日も忙しい日々が続きます。

第 133 回 フランス・アラカルト「ベリー地方のジョルジュ・サンド」(1/13) 案内

❖ 日時：2016 年 1 月 13 日 (金) 15:00~16:50 ❖ 会費：会員 1000 円、一般 1500 円

❖ 会場：奈良市中部公民館視聴覚室 (奈良市奈良市上三条町 23 番地の 4)  
(変更の可能性あり、正式には 12 月 17 日 (金) に確定、参加希望者は要予約)

❖ 問い合わせと申込先：Nasai206@gmail.com tel: 090-8538-2300 (浅井)

❖ ゲスト：高岡尚子さん (略歴) 大阪府吹田市生まれ。大阪大学大学院文学研究科仏文学専攻博士課程修了。博士 (文学)。主な研究分野は 19 世紀フランス文学、文学とジェンダー。現在奈良女子大学教授。主要著書『摩擦する「母」と「女」の物語—フランス近代小説にみる「女」と「男らしさ」のセクシュアリティ—』(晃洋書房 2014 年)、『恋をする、とはどういうことか?—ジェンダーから考えることばと文学—』(ひつじ書房・2014 年)、『200 年目のジョルジュ・サンド—解釈の最先端と受容史』(共著・新評論 2012 年) 他。

❖ 高岡尚子さんからのメッセージ：フランスの中部地方には、ほとんど観光資源がありません。その中で、19 世紀の女性作家ジョルジュ・サンドが居を構え、物語の舞台として描いたノアン Nohant とその周辺の小さな町・村・城は、現在、多くの愛好家を惹きつける場所として脚光を浴びつつあります。サンドがショパンと暮らし、多くの友人たちを迎えた館と、今も当時の雰囲気の色濃く残す村々の様子をご紹介します。作品の世界をたどります。  
(次のフランス訪問の際は、ぜひ、中部地方へ!)



フランス語で読む日本古典：『枕草子』(Notes de Chevet) より「冬はつとめて」

高校時代、古文の授業で暗記した人もおられるのではないのでしょうか。平安時代のお正月も今も、変わらないところは…?



清少納言

《冬はつとめて。雪の降りたるはいふべきにもあらず。霜のいとしろきも、またさらでもいと寒きに、火などいそぎおこして、炭もてわたるも、いとつきづきし。昼になりて、ぬるくゆるびもていけば、火桶の火も白き灰がちになりて、わるし。(…) 正月一日は、まいて空の景色うらうらと、めづらしかすみこめたるに、世にありとある人は、みなすがたかたち心ことにつくろひ、君をも我をもいわひなどしたる、さまことにをかし。七日、雪まのわかなつみ、あおやかに、例はさしもさるもの目ちかからぬ所に、もてさわぎたるこそをかしけれ。白馬見にとて、里人は車きよげにしたててみに行く。》

En hiver, j'aime le matin, de très bonne heure. Il n'est pas besoin de dire le charme de la neige ; mais je goûte également l'extrême pureté de la gelée blanche ou, tout simplement, un très grand froid ; bien vite, on allume le feu, on apporte le charbon de bois incandescent ; voilà qui convient à la saison. Cependant, à l'approche de midi, le froid se relâche, il est déplaisant que le feu des braisiers carrés ou ronds se couvre de cendres blanches. (...) Le premier jour de

l'année, surtout, me plaît. Le ciel pur se voile d'une merveilleuse brume. Tous les hommes soignent particulièrement leur figure et leur tenue, ils présentent leurs souhaits au Prince et aussi à eux-mêmes. C'est vraiment ravissant. Le septième jour, on va cueillir les « jeunes plantes », vertes dans les endroits où la neige a fondu. Quelle agitation parmi les dames, charmées de trouver ces plantes si près du Palais, où l'on n'est pas habitué à les voir ! (traduit par André Beaujard)

《2016 年度第 5 回理事会報告》…事務局

日時：2016 年 11 月 17 日 (木) 15:00~16:30

場所：放送大学奈良学習センター-Z308 室

出席者：三野、野島、濱、中浦、高島、浅井

議題 1. 9/29 理事会後の活動：(10/15) ガイドクラブ 當麻寺散策、(10/14~16) ヴェルサイユ市長夫妻 副市長奈良訪問、(10/23) 第 42 回日仏シネクラブ 例会。議題 2. 今後の行事：(11/23) 秋の教養講座 講演会と懇親会、(1/13) 第 133 回フランスアラカルト「ベリー地方のジョルジュ・サンド」ゲストは高岡尚子さん、(2/11) 2017 年度総会・新年会：会場第一候補は菜宴。議題 3. Mon Nara 三野会長による仏語講座開講。議題 4. 来年度役員について。次回理事会 1 月 19 日 (木) 15:00~16:30 菜宴

会員通信

★12 月 23 日 (金) 14:00 梨里香「クリスマスコンサート~10 周年を記念して」京橋 Studio J にて、連絡先 090-9614-6477 (中辻)

★1 月 15 日 (日) 15:00 奈良フィルハーモニー管弦楽団「ニューイヤークンコンサート」大和郡山城ホール、ヴァイオリン岩佐直子出演、連絡先 090-5042-3659 (岩佐)



編集後記

☆今から百年前の 1916 年 12 月 9 日、夏目漱石は亡くなりますが、その一年前に「水仙や早稲田の師走三十日」(Ah les fleurs de narcisses / chez moi à Waseda / aujourd'hui le 30 décembre) という俳句を詠んでいます。大掃除をすませて新しい年を迎える前に床の間に活けたのかもかもしれません。「水仙」は漱石の好きな花の一つだったようです。☆仏語の« narcisses »にはギリシア神話に由来する「水面に映る自分の姿に恋をした美少年」の意味があります。☆英語では« narcissus »の他 « daffodil » (黄色のラッパスイセン) が知られています。イギリス湖水地方を旅された方はワーズワースの詩を思い起こされることでしょう。漱石も英文学の学生時代ワーズワースを愛読していました。☆日本語の水仙は中国の古典に由来する「水辺の仙人」から。水辺の花には不思議な力がありそうです。(N. Asai)

◆当協会では会員を募集しております。お問合せは下記事務局まで。◆本誌への投稿を歓迎します。誌面の都合で意味を極力変えずに表現を変えさせていただくことがあります。次号は 1 月 31 日が原稿締切日です。

Mon Nara

nov-dec 2016 11-12月合併号 numéro278

奈良日仏協会 Association Franco-Japonaise de Nara

HP : http://www.afjn.jp E-mail : nara.afj@gmail.com FAX : 0742-62-1741

〒630-8226 奈良市小西町 19 マリアテラスビル 2F 野菜ダイニング菜宴 [郵便物のみ] 発行責任者：三野博司